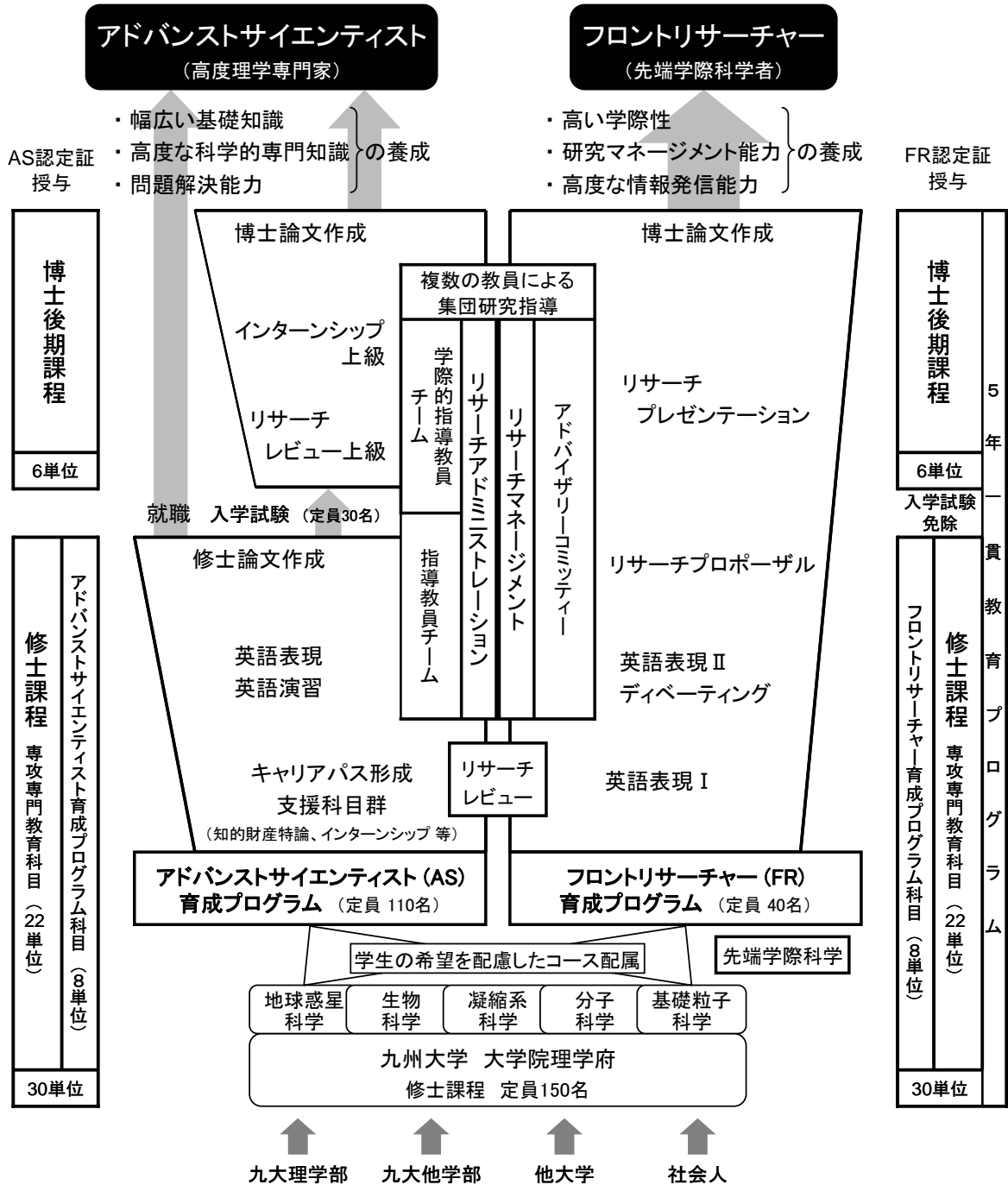


教育プログラムの概要及び採択理由

機 関 名	九州大学	申請分野(系)	理工農系
教育プログラムの名称	先端研究者と高度専門家育成の理学教育 (専攻横断教育プログラムと専門教育の融合)		
主たる研究科・専攻名	理学府		
(他の大学と共同申請する場合の大学名、研究科専攻名)			
取 組 実 施 担 当 者	(代表者) 宮原 三郎		
<p>[教育プログラムの概要]</p> <p>本申請は、先端学際科学者と高度理学専門家の育成を目的として、複数の指導教員によるきめ細かなティーメード教育、自ら課題を企画し問題を解決する能力の養成を目的とするリサーチマネージメント／リサーチアドミニストレーションの指導を特徴とする2つの並列した専攻横断型プログラムを設置し、専攻独自の専門教育との融合を図ろうとするものである。</p> <p>九州大学大学院理学府では、「理学は、自然界に存在する真理を明らかにして、体系的に説明する普遍的法則を構築する学問である。理学府は、教育研究を通じて自然の法則及び理学の理念・方法を教授し、国際的な場で活躍できる広い視野を持った先端的研究者、高度な能力と学識を備え社会の広い分野で活躍する高度な専門家を育成することを目的とする」という教育目的を掲げ、高度な理学専門教育を行っている。本学府は、21世紀に入り、これまで以上に国際的かつ学際的になっている科学の今後を見据え、上記教育目的を実質化する第一段階として、それまで各専攻が個別に行ってきた大学院教育の基盤となる教育カリキュラムを統括し、理学府全体に広げた「フロントリサーチャー育成プログラム」を平成17年度より実施してきた。このプログラムは「魅力ある大学院教育」イニシアティブにも採択され、広い視野に立った独創的な視点で研究テーマを柔軟に企画でき、広く一般社会に情報発信できる能力のある先端学際科学者の育成を図ることを目的に掲げている。発足からすでに1年半が経過し、優れた成果を挙げつつある。</p> <p>しかしながら、この「フロントリサーチャー育成プログラム」は理学府150名のうち40名を対象とした少人数のためのプログラムである。一方で大学院には、高度な科学的知識と問題解決能力を備えた、社会の様々な分野で活躍できる人材の育成も求められている。教育目的に掲げた「高度な能力と学識を備え社会の広い分野で活躍する高度な専門家の育成」という目的は、まさにこのことに対応する。現行のフロントリサーチャー育成プログラムのみからなるシステムを発展させ、全学府に拡大し、さらに修士課程で修了する大学院生にも対応できる「アドバンスサイエンティスト育成プログラム」を新たに設置、整備することが急務である。</p> <p>新育成プログラムは、国際化や科学技術の進展による急激な社会変化に柔軟に対処できる、より社会の要請に密着した高度専門家の育成を目的とする。このプログラムもフロントリサーチャー育成プログラムと同様の専攻横断型プログラムであり、一部共通のカリキュラムを持つが、複数の指導教員体制のもとで自ら課題を企画し問題を解決する能力の養成を目的とする科目を、アドバンスサイエンティスト育成プログラム用に再構築した「リサーチアドミニストレーション」をはじめ、「科学倫理・哲学」、「インターンシップ」、「広域基礎科学」など、プログラム独自の、社会の要請に応える新しいカリキュラムを整備する。</p> <p>今回応募するプログラムは上記2つの並立する教育プログラムから成り、理学府として個々の大学院生のニーズに合わせた教育課程を用意し、大学院生の指向や出自が多様化する今後の大学院教育に柔軟に対応できるシステムを構築し、大学院教育の実質化を目指すものである。今後、本学府の学生は上記2つの教育プログラムのいずれかに属し、それぞれの指向に合ったきめ細かな指導を受けることができるようになる。この新教育システムのもとで、専攻独自の専門教育はより効果的に機能し、高度の専門性、主体性、国際性、学際性を兼ね備え、直面する課題に対し柔軟な思考と深い洞察力に基づき主体的に対処できる能力、学際的な場において課題を適切に理解し、うまく表現、交渉できる能力、課題の企画・実行から成果発信までを一貫して実施し、異分野への積極的な展開ができる能力の涵養が図られ、上記教育目的が実現化されることが期待される。本応募は、そのような世界をリードしうる大学院教育システムの構築のために申請するものである。</p>			

履修プロセスの概念図（履修指導及び研究指導のプロセスについて全体像と特徴がわかるように図示してください。）

多様な社会の要請に応えた人材育成



※博士後期課程入学(進学)時にプログラム間の移動は可能

<採択理由>

大学院教育の実質化の面では、「先端学際科学者と高度科学専門家の育成」を目指し、専攻横断的なシステムの中で、それぞれの学生に適した進路を自覚させ、それに沿った体系的な教育課程が編成されており、複数の教員による集団研究指導体制が整備され、着実な進展が見られる点は高く評価できる。

教育プログラムに関しては、「フロントリサーチャー育成プログラム」に加え、新たに「アドバンスサイエンティスト育成プログラム」を設置し、その育成を実践することで、研究科全体の高度化が図られ、理学教育に新風が吹き込まれることが期待できるが、理学系大学院生に対するインターンシップの実施については、その特性を踏まえ、計画の工夫が望まれる。